NPO法人ワンファミリー仙台

令和7年1月28日取材

ごみを拾う活動が、人と人をつなぐ場になっています。

2002年から、仙台市を拠点に住居支援を起点とした生活・就労・自立支援を行っているNPO法人ワンファミリー仙台。支援を通じて、人と地域のつながりを育み、誰もが「生きていてよかった」と思える社会を目指して活動しています。そんな団体の代表に、20年以上続けている地域清掃活動について伺ってみました。

理事長
立岡　学さん
宮城県出身。趣味は、出張先でおいしいものを見つけること。

ごみ拾い活動で社会とのつながりを再構築

― 20年以上もごみ拾い活動を続けていると伺いましたが、きっかけはどのようなことだったのですか。

立岡さん：スタートしたのは、2002年の4月です。きっかけは私たちがサポートしている路上生活をしている人たちの「朝食を食べることができれば、その日を生きることができる」という声を耳にしたことでした。また、社会とのつながりを絶たれ、孤立している状況を見ていましたので、一緒にまちをきれいにすることで、何らかのつながりを感じられたらいいのではないかと考えました。現在も活動終了後には、朝食としておにぎりやお弁当を渡しています。

　最初は試行錯誤の連続でした。路上生活者がまちを掃除するということ自体、周囲から驚かれることもありました。しかし、定期的に顔を合わせることで、互いに支え合う関係を築くことができたのではないかと思っています。

― 活動の内容を教えてください。

立岡さん：毎週水曜日の朝7時30分に仙台駅西口に集合して出発し、8時30分まで繁華街を中心にごみを拾い集めます。終点は、私たちの事務所の近くにある榎木公園です。参加人数は20人前後で、中には、東日本大震災の際に物資配送や仕分けを手伝い、それがきっかけで路上生活から脱した人もいます。社会と関わる機会を得ることで、少しずつ生活が変わっていくのを目の当たりにしてきました。

― 市民の方も参加しているそうですね。

立岡さん：はい。まちをきれいにするという共通の目的をもつことで、異なる背景をもつ人々が交流し、理解を深め合う機会になっています。また、当団体のスタッフもこの活動に関わっています。最初はボランティアで始めたのですが、現在はNPO法人の正式な業務になりました。スタッフはごみ袋や火ばさみの準備、清掃後のお弁当配布などを担当しています。

自分が住むまちの課題を「自分ごと」に

— ごみ拾い活動を続ける中で、ごみの種類や量に変化はありましたか。

立岡さん：最も顕著なのは、「ごみの量が減っている」ということです。私たちの活動だけではなく、企業や市民の方々も清掃活動を行うようになり、まち全体の意識が高まっているようです。

　また、自治体や地元企業との連携も深まりつつあるのも、仙台市の特徴だと思います。例えば、空き缶やペットボトルの回収を効率化するための施策や、地域の防犯対策と連携したクリーンアップ活動の計画など、清掃を通じたまちづくりの可能性が広がっていると感じます。

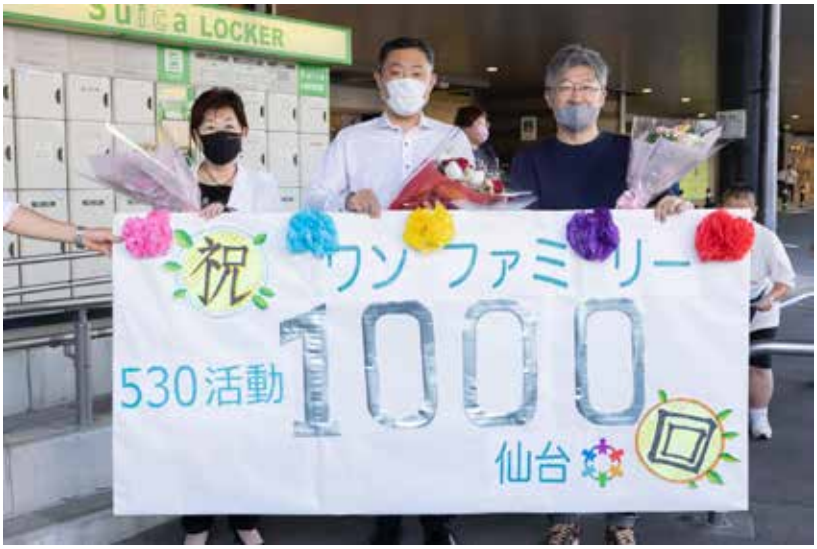
— 苦労されたことなどはありますか。

立岡さん：路上生活をしている方々は、皆さんが携帯電話を持っているとは限らないので、天候がごみ拾いに適さない日も、中止の連絡ができないことです。ですから天候に関係なく、水曜日の朝は必ず集まっています。この活動が、人と人をつなぐ場にもなっていますからね。

— 最後に、今後の目標をお聞かせください。

立岡さん：理想は、私たちが行っている活動が不要になるのが一番いいことだと思います。つまり、まちにポイ捨てされたごみがなくなり、住む場所がなくて困る人がいなくなれば、私たちの役目は終わります。しかし、そうならない限りは、粛々とこの活動を続けていきたいと思っています。

　「環境問題と人権問題は、人の心の問題である」と私は考えています。ごみをポイ捨てする人は、ただ無関心なだけかもしれませんし、路上生活者への関心が薄いのも、「自分とは違う世界の人」という意識があるからかもしれません。けれども、「目の前にあるごみを拾う」というように、少しずつ意識を変え、行動を変えていくことで、社会のあり方を変えていくことができるかもしれません。私たちはこれからも、仙台のまちと、まちの課題を他人ごととせず、自分ごととして捉える人が増えることを願って、NPOの活動もごみ拾いの活動も続けていきます。

【NPO法人ワンファミリー仙台のごみ拾いスタイル】

活動を始めた当初は、「530（ごみゼロ）活動」と、文字がプリントされたジャンパーをつくったりもしましたが、いまでは「ただ、ごみを拾うことに集中すればいい」というシンプルな考えに落ち着いたそうです。スタイルにはこだわらず、「継続すること」を重視しています。